

# 『古事記』再神話化の言説

——『三大考』の成立をめぐって——

服部中庸『三大考』は、寛政九年（一七九七）、『古事記伝』十七之卷附卷として刊行された。その内容は周知の通り、宇宙の始まりにおける、天、地、泉の三つの神話的世界、すなわち「三大」の形成過程を、十枚の図による『古事記』の図解というかたちで提示したものである。刊行後には、その所説をめぐり、本居大平や平田篤胤などのあいだに激しい論争を呼び起こす契機となった。そこで争点となったのは、端的にいえば、『古事記』を、どのような世界の成り立ちを語る神話として読むかということであった。それは、近世における『古事記』の再神話化の問題にほかならない。

本論文では、『三大考』の成立過程と『三大考』批判の言説の分析をおこなうことにより、『三大考』が、『古事記』というテキストから読み出していった神話の輪郭を明

確にし、『古事記』の読み直しをつうじた、世界のあらたな神話的根拠づけという観点から、『三大考』をめぐる問題を捉えなおすことを試みたい。

## 一、『三大考』の諸問題

はじめに、刊本『三大考』とその問題点の所在について確認しておく。刊本『三大考』は、十枚の図とその解説を中心に構成され、冒頭には序文を、末尾には寛政三年（一七九一）五月二十五日の日付と宣長による跋を附す。内容的には、『古事記』を主とした古伝の読解によって、世界の成り立ちを説明しようとしたものだが、はじめの第一図から第四図までにおいて、その物語の大枠が示されることになる。すなわちそれは、宇宙の始まりに「虚空」中へ天之御中主、高御産巢日、神産巢日三神が出現し（第一図）、

金 澤 英 之

つぎに産巢日の神々の「産靈」のはたらきによつて、浮脂の如く漂える「一物」と呼ばれる存在が出現し(第二図)、この「一物」から葦牙の如く萌え騰つたものが分化して天となり(第三図)、さらに垂降つたものは泉となり、残りが地となった(第四図)というものである。

序には、古伝の解釈にあたつて「其説は、すべての事は、古事記伝に依れり」(二九九)とあるが、その『古事記伝』では黄泉の成立についてはとくに触れられないもの、はじめの三神が出現した場所が高天原ではなく「虚空」であつたことについて、「さて如此天地之初発と云るは、たゞ先此世(略)の初を、おほかたに云る文にして、此処は必しも天と地との成れるを指て云るには非ず、天と地との成れる初は、次の文にあればなり」(二二三)「又此神たちは、天地よりも先だちて成坐つれば、(略)たゞ虚空中にぞ成坐しけむを、(略)於高天原一成としも云るは、後に天地成ては、其成坐りし処、高天原になりて、後まで其高天原に坐々神なるが故なり」(二二二—二二三)とあり、また天地のはじまりに浮脂の如きものが成り出で、そこから萌え騰つたものが天となり、残りが地となつたことについては、「抑此(『古事記』に「国稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣瓠之時、如葦牙因萌騰之物而成神名、云々」とある—金澤)段は、天地の成る初発を云るにて、先其初に、此(浮

脂の如き—金澤)物の一叢生出たるなり」(二三四)「さて此浮脂の如く漂蕩へりし物は、何物ぞと云に、是即天地に成るべき物にして、其天に成べき物と、地に成べき物と、未分れず、一に滑りて沌かれたるなり」(一三五)また、

「葦牙の如く萌え騰る—金澤)物は天と成べき物なり、さて此物は、何処より萌騰りしぞと云に、彼虚空中に漂蕩へる浮脂の如くなる物の中より出たるなり(略)さて此は天の始にて、如此萌騰りて終に天とは成れるなり」(一三六—一三七)「抑彼浮脂の如くなる物は、天と地と未分れずして、たゞ先一沌に成れるにて、其中に天となるべき物は、今萌騰りて天となり、地となるべき物は、遺り留りて、後に地となれるなれば、(略)是正しく天地の分れたるなり」(一三七)という記述が三之巻に見える。さらに「産靈」のはたらきに関しても、「さてかく浮脂の如くなる物の生初めしも、其が分れて天地と成れるも、又此次々の神等の成坐るも、悉に皆二柱の産巢日大神の産靈によらずと云ことなし」(一三八)とあり、『三大考』冒頭の図が基本的に『古事記伝』の説を下敷きとしていることが了解される。

これに加え、『三大考』第七図ではさらに二つの主張が提示されることになる。ここは天照大神、月読命、須佐之男命の三貴子の分治を図解したのだが、図の傍らに、

「天ハ即日ナリ、其中ナル国ヲ、高原ト云」「泉ハ即月ナリ、其中ナル国ヲ、夜之食国ト云」とあり、まず天、地、泉という神話的三世界が日、地、月という現実の天体として定位される。さらに、ここでは夜之食国と泉国とが同一の世界を指す名称であり、月読命と須佐之男命もまた同一神であるという説が唱えられる。その根拠として、『日本書紀』本書では月読命が、『古事記』および『日本書紀』一書では須佐之男命が、おなじ「海原」の統治を命ぜられること、『日本書紀』一書の月読命による保食神殺害の挿話と、『古事記』の須佐之男命による大宜都比売殺害の挿話が互いに酷似していること、ツクヨミとヨミとの名辞上の類似、などの事例が挙げられている。したがって、この第七図において天照大御神の名は天の部分に、月読命（＝須佐之男命）の名は泉の部分に書き込まれている。

第十図では、三世界が分離して現実の日、地、月として完成された様子が表されるが、この結果についても、「これらの事、すべて神の産霊の奇く妙なる理によりて然るなれば、さらに人の小き智を以て、とかく測り識るべき限にあらざ」（三二二）と、やはり「産霊」のはたらきによって説明されている。

以上、「一物」という始源的存在から天、地、泉という三つの世界が分化し、現実の日、地、月という三つの天体

として完成されるまでの展開を、宇宙の始まりに「虚空」中へ出現した神々の「産霊」を動因とする、一連の生成運動として見通したのが、『三大考』の読み出した世界の成り立ちの物語だったといえる。

しかし、このようなかたちで『三大考』が試みた古伝の図式化という作業は、『古事記』の解説という範囲を超え、それ自体が神話の新たな語り直しという性格をもつに至るものだったというべきだろう。それだけに、『三大考』の刊行はその後さまざまな反響を呼ぶこととなり、その是非をめぐって、門下の国学者たちのあいだで、批判、擁護双方の説が提唱され、『三大考』論争といふべき言説空間を生み出す契機となったのである。ここで、論争の争点となった問題を先取りするかたちで、『三大考』の所論のなかでもとくに重要な特徴を挙げれば、つぎのようになる。

一、天、地、泉という神話的世界を、日、地、月という現実の天体として定位すること。

二、泉国と夜之食国を同一の世界とし、同時に須佐之男命と月読命を一神とすること。

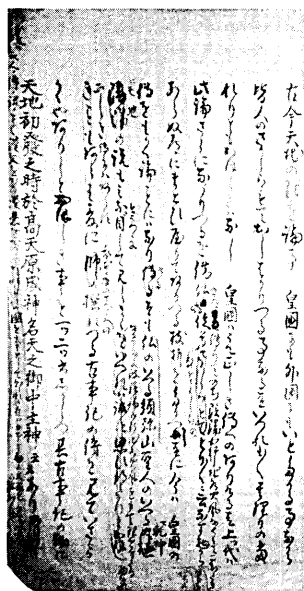
三、『古事記』に「国稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣疏之時」とある、浮脂のように漂っていた「国」を、この時点ではまだ天も地もなかったとして「一物」という抽象的な存在へ置き換え、そこから天地が分かれたと

することによって、天地の分化を産巢日神の出現以降に読み込むこと。

これら、『古事記』再神話化の言説としての『三大考』の中核を成す諸論が、いかにして形成されるに至ったか、また、そこに宣長の意向がどのようなかたちで働いていたかを知るためには、『三大考』の草稿を併せ見ることが、つぎに必要なこととなる。

## 二、『三大考』の成立

『三大考』の草稿としては、これまで西川順土氏によって、二種の稿本が紹介されてきた。<sup>③</sup>ひとつは「天地考」と題し、前半に文章による総論部分を持ち、後半に十一枚の図を収める。もう一方は、表紙を欠き題名を明らかにしな



【附図1】

いもので、おなじく十一枚の図と、その後につけられた若干の解説部分を持つ。現在、この二種の草稿の自筆本はいずれも松阪市服部哲雄氏の所蔵になるが、今回その調査を行った際、これらに加え、さらに「天地初発考」と題するもう一種類の草稿本に接する機会を得た（附図1参照）。

これら三種類の草稿および刊本『三大考』とのあいだの關係について、まず「天地考」は『三大考』と同じく寛政三年五月二十五日の日付を有し、刊本『三大考』にもっとも近い草稿と考えられる。内容的にも、天Ⅱ日、泉Ⅱ月とする構想、泉国と夜之食国、須佐之男命と月詭命を同一視する構想が見られ、天地の分化を、はじめの三神の出現後に位置づける点も『三大考』と共通する。ただし、『三大考』において「一物」の出現を描く第二図は「天地考」にはなく、第一図におけるはじめの三神の出現につづけて、すでに天と地とが分離しつつある状態が描かれており、この点が「天地考」と『三大考』のあいだのもっとも大きな違いとなっている。また、「天地考」では、各図の解説部分は『三大考』とくらべ、非常に簡略なものになっているが、それに代わって、前半部分にまとまった総論があり、この「天地考」前半の総論部分が、『三大考』の段階で、各図の解説として再編成されてゆくことになる。

一方、表紙を欠く方のものは、内容的に「天地考」の十

一枚の図の部分の草稿とみとめられ、西川氏によつて「初稿本」と呼ばれた。図の後ろに若干の解説を添えた以外、「天地考」前半の総論に相当する部分は持たない。この西川氏のいう「初稿本」の最大の特徴は、宣長の筆になると認められる書き入れが約五十箇所にわたつて存在することであり、これによつて、『三大考』の成立に、宣長自身の積極的な関与があつたことを実証することができるのである。この「初稿本」に対する宣長の書き入れは、「天地考」において全面的に受け入れられることとなつてゐる。

そして今回新たに紹介する「天地初発考」と題するもう一種の草稿は、「天地考」、「初稿本」のような図を持たず、文章のみから成るものだが、以下に検討するように、「天地考」前半の総論部分に相当することが明らかかな性格の資料であり、したがつてこの「天地初発考」と「初稿本」とをあわせ見ることによつて、はじめて「天地考」の全体にわたる構想の成立を論ずることが可能になるのである。

「天地初発考」と「天地考」前半の総論部との対応については、たとえば両者の冒頭、天地の始まりを説くことになつた事情を説明した箇所で、「天地初発考」には「皇国は元正しき伝へのありける故上つ代は此論さらになかりつるを儒仏の（の道伝りてのち陰陽五行地水火風なとてこちたき理をもて）（此は）徒等さかしまつて（おのがさか

しらの）とりくくに云なす物からあらぬ道にまどひ居りてありつる枝折をたかへつ（し）故に今は皇国の伝をもかく論ことにはなりつる（ける）」（傍点は抹消部分、括弧内は補入部分を示す）とあり、一方「天地考」には「皇国ハ元正シキ伝ヘノアリケルユヘ上ツ代ハ此論サラニナカリツルヲ後世儒仏ノ道伝リテ後陰陽五行地水火風ナド、テコヂタク名ヲ以テ此從等己ガ賢ヲノトリ、ニ云ナス物カラアラヌ道ニマドヒヤリテアリツル枝折ヲタガヘタルユヘ今ハ皇国ノ伝ヲモカク論フコトニハナリケル」（三一七）とある部分をくらべれば、一目瞭然であるう。同様に、「天地考」総論部分の大半は、対応する箇所を「天地初発考」中に見いだすことができ、後に『三大考』各図の解説へと再編成される「天地考」総論部の形成が、「天地初発考」までさかのぼつて考えられねばならないことが了解される。

こうして、基本的に「天地初発考」と「初稿本」を合わせるかたちで「天地考」が構成されていることが明かとなつたが、同時に「天地初発考」と「初稿本」の間には草稿としての性格を明かに異にする点がみとめられ、両者は必ずしも同一のレベルで捉えられるべきものではない。

具体的にいえば、「天地初発考」では随所に中庸自身による大幅な削除、書き足しのあとが見られ、かなり初期の草稿であることがうかがえるのに対し、「初稿本」では、

中庸本人が修正したとみられる箇所はほとんどない。

また、「初稿本」では全体にわたって宣長の書き入れが存在するが、「天地初発考」には宣長の書き入れと認められる箇所は見あたらない。

さらに、両者は内容的にもいくつかの重要な差異を示している。第一に、刊本『三大考』において、宇宙全体の生成の動因として強調される「産靈」のはたらきについて、「初稿本」では二箇所の言及が見られるのに対し、「天地初発考」ではまったく触れられていない。第二に、「天地初発考」では、外国は「あふらのこときもの」が、潮に凝りついて成ったとする記述があり、これは刊本『三大考』が、大八島は浮脂の如きものが伊邪那岐伊邪那美二神のミトノマグハヒの滴りに凝りついて成ったのに対し、外国は潮の沫が自ずから固まって成ったとして峻別をおこなう説の未発展の段階を示すものだが、「初稿本」ではこの点については触れていない。これらの差異は、「天地初発考」とそれが改稿されて成った「天地考」総論部とのあいだにもより明確に現れており、たとえば「天地初発考」では「外国はいかにと云にこはしほのあはのよるにあふらのこときもの自らこび付て国となりたるもの也こも又た々にはならず皆少名彦名神の経営し玉ふ故也」とある部分が、「天地考」総論部では「外国ハイカニト云ニコハ地ノナリ

オヘルニシタガイテ塩ノ沫ノヲノヅカラコリカタマリタル国ナリコモ又タ々ニハナラズ皆産靈神ノ御魂モテ少名毘古那神ノ経榮シ給フナリ」(三三三)となっている。このように「天地考」総論部では「産靈神ノ御魂(御靈)」の働きについて挿入した箇所が計三箇所、「あふらのこときもの」あるいは「うきあふらのこときもの」という語句が削除された箇所が計二箇所見られ、これらの点に関するかぎり「初稿本」はすでに「天地初発考」よりも「天地考」に近い内容を備えたものとなっている。

その他、「天地初発考」には図の存在についてふれた文言がみあたらないことから、両者が並行して同時に書かれたとは考えにくい。

したがって、刊本『三大考』の成立までには、はじめに図を持たない概論のみの「天地初発考」が存在し、これを図示化した「初稿本」へ、つぎに「初稿本」に対する宣長の修正を経て、この両者をあわせて改稿した「天地考」へ、さらにそこから再編成を行って『三大考』へという段階があったと推定されるのである。

ところで、これらの草稿本を見合わせることににより、刊本『三大考』にあらわれた問題点の形成過程はどのようなように理解されるだろうか。まず、最初の「天地初発考」から最終的な『三大考』の段階にいたるまで、もつとも変化の少

なかつたのは、神話的三世界を、日、地、月という現実の天体として定位する構想である。これについては、すでに「天地初発考」において、「つらつらおもふに此高天原は今天津日なるへし」「高天原は天津日也」などの表現がみとめられ、また高天原、地、夜之食国の三世界がつながった様子を文中に書き込んだ箇所では、高天原の傍らに日、夜之食国の傍らに月と記されている。『古事記伝』においては、日月は天照大神、月読命の正体として把握されており、これらを高天原、泉国という世界そのものとして把握するのはまったく『三大考』独自の主張であつたが、「初稿本」の段階で高天原が日であることを論証する末尾解説の部分に、「そのうへ国とさしていへる物日の外にはなきを思ふべし」という宣長の書き入れがあり、この説を宣長が承認していたことが確認される。

しかし、この際に泉国と夜之食国を同一の世界として同時に月に同定し、また須佐之男命と月読命を一神とするという、『三大考』の第二の問題は、はじめから確定していたわけではなかつた。まず、「天地初発考」においては、月に同定されるのは原則として夜之食国であり、天を上、地を中、夜之食国を下とするつづきざまからいえば、夜之食国はいわば根の部分にあたるとして、これが根の国（根の国即ち泉であることは、無条件の前提とされていたよう

である）と同一である可能性については触れているものの、別の箇所ではまた「若月は根の国にあらず共夜の食国といへは日の御かけのかふらさる所なれば必地の下つかたに月ハナリ出シ事アキラケシ」といつているように、両者の同一性について明言は避けている。これが「初稿本」になると、須佐之男命と月読命が同一神である可能性に触れながらも、「慥なる伝へなければ猶強て思はゞ私意に落行まく記のまゝに図は云フ」（第六図）として、夜之食国、黄泉国同一説はいったん撤回され、夜之食国は月、黄泉国は地中としてそれぞれ別個に描かれることになる。ところが、これに対して「黄泉国ノ事ヲコ、ニ書テハタガヘリ」とし、夜之食国とある部分を指して「黄泉国ハコ、也」とする宣長の書き入れがあり、この指示が全面的に受け入れられた結果、「天地考」では、はじめから両者は同一の世界として月の場所に描かれ、解説部分でも多くの紙数をさいて須佐之男命と月読命とが同一神であること、黄泉国と夜之食国とがおなじ世界を指す呼び名であることが説明されるようになるのである。『古事記伝』九之巻にも、両神が同一神である可能性にふれた箇所はあるが、あくまで暗示の段階にとどまつており、また黄泉の成立の事情に関する説明は全く載せない。したがって、泉国・夜之食国同一説、須佐之男命・月読命一神説は、ここにいたつてはじめて断定

されたことになる。

一方、残る第三の問題に関しては、これが「古事記伝」へとつながる要素を含むものであることははじめに述べたとおりだが、葦牙のごときものが萌え騰つたところに天と地との創造を見ること自体は、すでに「天地初発考」の段階で「扱此あしかびのこときもの立のほりて天トなりたり」という記述があり、はじめからこのような立場で考えられていたことがわかる。また、夜之食国のはじめについても「天地初発考」の段階で、「又夜の食国をおもふにこは下りしづむしたりのこりたる国にて」と、天地の分化と類似の過程で生成されたという考え方を示している。しかしながら先に見たように、この段階では最終的に『三大考』全体の展開を導く動因となる「産靈」の働きについて触れた箇所がないため、天、地、夜之食国の分化生成が、「産靈」のはたらきと結びつけられてはおらず、「すべての事は、古事記伝に依れり」としたその師説の取り込みはいまだ不十分なものにおわつてゐる。これが図の作製という作業を経て「初稿本」に至ると、「空しき中に初て三はしらの神なりまして其産靈によりてうきあふらのこときものなれり」（末尾解説）、「此段より下皆高御産巢日神産巢日神の産靈によりてなれるものなり」（第二図）という文言が見られるようになり、全体の展開をうながすものと

して「産靈」のはたらきの導入が行われるようになる。「天地初発考」には「初稿本」に存在するような宣長の書き入れがないため、この変化にどの程度宣長の直接の指示があつたかということは不明だが、『雅用録』寛政元年（一七八九）三月の条に「一、天地初発考 服部中庸」とあり、宣長がこれを見ていた可能性は大いに考えられる。いずれにせよ、「天地初発考」から「初稿本」へ移行する際の「産靈」の導入は、『古事記伝』における宣長の見解を、よりいっそう反映する結果となるものであつた。「産靈神ノ御魂」についての言及が、つぎの「天地考」の段階においても、総論部分に挿入されていることは、先に見たとおりである。

また、「初稿本」では宣長の書き入れとして「夜食国ノ始ハ伝ヘナケレドモモエ上レル物高天原トナレルニ准ヘテ垂リ降レル物夜食国トナレルコト知ベシ」（第三図）とあり、浮脂の如きものからの天、地、黄泉の分化が、宣長の積極的に認めるところだつたことが確認できる。

さらに、「天地考」と『三大考』とのもつとも大きな違いとなる『三大考』第二図の存在も、この点と密接な関わりを持つてゐる。従来あまり論じられてこなかつたことだが、この違いは「天地考」が『三大考』へと改稿、再編成された際、天と地とが分かれる以前の存在が何であつたの



かという問題が意識されていたことを示すと考えられよう。ここで注意を惹くのは、「天地考」総論部では「カ、レバ天ハ地ヨリナリ出タルモノ也」(三一八)と、天地のわかる以前に存在したものが、「一物」のような抽象的存在ではなく、「地」であつたという意見が示されており、一方これに対する頭注のかたちで、「天ハ地ヨリナリ出タルト云事イカク」という反対意見が唱えられていることである。この見解の揺らぎを経て、やはりそれは、天でも地でもない未分化の何かだつたという認識を明確化していった結果が、『三大考』における「一物」だつたのだといえるだろう。このように、「一物」という抽象的存在を導入し、その分化以前にはいまだ天も地もなかったとすることは、はじめの三神が高天原ではなく「虚空」の中へ出現したとする解釈と相俟つて、宇宙の始まりにおいて、まずほかならない「産霊」の神が存在し、そのはたらきかけによつてはじめて天地が生成したという読みを、より強固にするものであつた。

以上をまとめてみよう。まず、『三大考』にいたる古伝の図式化という構想は、「天地初発考」の段階で、神話的世界の天体的定位という独自の発想と、浮脂の如きものからの天地の分化という『古事記伝』へと遡る説との組み合わせを最初の骨格としてもつものだつた。ここへ「初稿

本」での図式化を経て、全体の展開をうながす動因としての「産霊」のはたらきが導入され、さらに「天地考」への移行の際には、直接に宣長により、黄泉国と夜之食国、および須佐之男命と月読命が同一であると断定されることになつた。そしてこの「天地考」が再編成され、その際「一物」が導入されることにより、宇宙の初めに出現した神々の「産霊」の働きをうけた一連の運動として、天、地、泉の成立を語るという立場がより強化されて成つたのが、『三大考』だつたといふことができる。

しかし、ここであらためて『古事記』の表現そのものに立ち返つてみれば、あくまでもはじめの三神の出現は「於高天原」といわれており、はじめに漂つていたものは、いまだ修理固成される以前の状態でもやはり「国」と呼ばれるのであつて、『古事記』の文言に即するならば、天と地はそもそものはじめから天と地として存在していたと読むのがもつとも無理のない解釈だろう。『三大考』第二図が「一物」を導入する際の引用文を見ると、この図のみ「古事記」からの引用がひとつもなく、すべて『日本書紀』からの引用により成り立っているが、このことも『三大考』の示した天地生成の解釈が、『古事記』の表現自体からは導き出し得なかつたことを如実に示している。また、天日、泉月論の論が『古事記』に見いだせないのは勿論、泉

国と夜之食国、須佐之男命と月読命を同一とする説も『古事記』から直接読み出せるものではなく、図式化という作業を経てはじめて断定されることになったものであった。『三大考』の解釈が『古事記』の再神話化となるゆえんであり、後の論争の係争点もこれらの問題に集中することになったのである。

次に、『三大考』刊行後の論争を視野に入れ、とくに批判者側によって提示された世界像との比較を通じ、『三大考』の読み出した『古事記』神話のありかたを照らし出したい。

### 三、三大考論争

『三大考』の刊行は、宣長の門人を中心にひとかたならぬ反響をひきおこした。そのもつとも早い例としては、本居宣長記念館所蔵の『天説弁々弁』に、鈴木胤の書き入れとして、『三大考』の版木彫刻が成つた際、胤が直接宣長に対して「一向ニ承ヒカヌ由」を申し入れた経緯が見えているが、本格的に『三大考』に対する批判が表面化しはじめるのは、刊行から四年後の享和元年（一八〇一）に、宣長が没した直後からのことだった。本居宣長記念館所蔵の『三大考弁々』に書き入れられた大平のコメントには、この当時、大平の下に、中庸をはじめとして、夏目鸞麿、須

賀直入、その他、後に三大考論争に関与するようになった人物が、「日夜会合シテツネニ古書ノ義ヲ論」じていたこと、伴信友や平田篤胤なども文通のあったことなどが記されている。<sup>8)</sup>『三大考』への批判の声に対し、中庸自身も現在その序文のみ存在が確認されている『三大追考』、および考察の範囲を水金地火木土の五惑星にまで拡大した『七大考』などの作品を著し、『三大考』以後の自らの見解を示したが、これらの著作ではちようどの当時伝わってきた地動説をはじめとする西洋天文学の影響が色濃く反映されるようになり、反対に「産靈」の原理を中心とした『古事記』神話の読解という方面への関心は薄れたものとなつてしまつていた。むしろ、『三大考』論争において、『三大考』の示した方向性は、宣長の没後に登場した平田篤胤によつて受け継がれてゆくことになる。篤胤は文化九年（一八一二）に「靈能真柱」を書いたが、この書において人間の死後の靈魂の行方を解きあかしつつ、「さて。その靈の行方の。安定を知らまくするには。まづ天地泉の三つの成初。またその有象を。委細に考察て。また。その天地泉を。天地泉たらしめ幸賜ふ。神の功德を熟知り（略）後に魂の行方は知るべきものになむ有りける」（九三）<sup>9)</sup>として、『三大考』の序文を引用し、さらに『三大考』にもとづいた十葉の図によつて、天、地、泉の三世世界の成り立ち

を説いた。以後、『三大考』論争は、中庸の説を擁護する篤胤と、大平を中心とした批判者側との対立というかたちで展開されてゆくこととなるが、ここではとくに批判者側の主だった著作を中心に検討し、『古事記』を、世界を根拠づける神話として読むうえで、どのような点が争われることになったのかを考えてみる。

『三大考』批判として生み出された一連の著作の中で、まずひとつの中心となったのが、文化八年（一八一）に書かれた本居大平の『三大考弁』だった。『三大考』の抱えた問題点のうち、『三大考弁』において批判の的となったのは、須佐之男命と月読命を同一神とし、同時に泉国と夜之食国を同一の世界とする説である。大平はこの説に対し、「月読命と須佐之男命とを一神也とせること甚しき強説也いともいと恐く忌はしき邪しま説にて古学の輩の神代の御典を解諭す者の掛ても云まじきこと也」（二四六）「さて又月読命の夜見と云ふ言と黄泉国の予美と云ふ言とを附会せて月を黄泉国也とせることもいたく僻説也」（二四六）と、強い調子で非難し、『古事記』や『日本書紀』の表現に即して読めばこの二神が別の神であることは疑う余地はないと断じている。

一方、『三大考』批判のもうひとつの柱となったのは、小林（植松）茂岳によって文化十三年（一八一六）に著さ

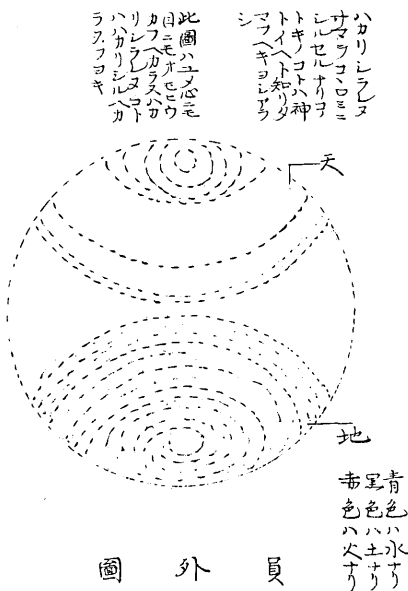
れた『天説弁』である。自筆本には、大平、鈴木胤による頭注が多く存在し、同書がこの二人の後ろ盾を得て著されたものであることがわかるが、ここでは、天<sup>ニ</sup>日、泉<sup>ニ</sup>月という神話的世界の天体的定位、および「一物」からの天地、泉の分化生成という点が問題とされた。日、月と、天、泉とが別物であることを証明するため、茂岳は天地初発の解釈から説き起こしてゆくが、その過程で「先古事記云、天地初発之時、於高天原成神名云々、如此アルヲ以テ思へバ、此時既ニ高天原ハ成リタリト見エタリ」（三三二）「サテ葦牙ノ如ク萌騰リシ物ハ、鈴木胤主云、葦牙ノ如クナル物ハ唯神ニ成ヘキ料ノ物トモ聞ユト云ル如ク、天ニ成ヘキ物トハ聞エズ」（三三二）と、「一物」から萌え騰った葦牙のような物が天となったとする『三大考』の解釈を否定し、天の成立については「天地初発之時トアレバ、此時天モ初メテ成シ物トハ聞エタレド、イカナリケン其サマナドハ伝ヘナケレバ曾ツテ知ルヘカラズ」（三三四）という見解を採る。また泉については「泉ト云所何処ゾト云ニ、コモ鈴木胤主ノ説ノ如ク、地中ナルヘクゾ思ハル、」（三四〇）としていた。

この他、批判者側の言説は、鈴木胤、夏目甕麿、須賀直入、春枝広高などによっても展開されていったが、『三大考弁』『天説弁』によって提示された主張は、基本的に他

の『三大考』批判の諸説にも共通する見解だった。こうした一連の批判者側の世界像を、もつともまとまったかたちで表現したのは、大平によって描かれた『麻杼比袁阿羅多武倍岐迦多』の図である。『麻杼比袁阿羅多武倍岐迦多』は、文化十二年（二八一五）の日付を持ち、三枚の図と「員外図」と名づけられたもう一枚の図とから構成される。また、今回その草稿と見られる二種の稿本の存在も確認された。これらはいずれも東大本居文庫所蔵になり、一方（草稿Aとする）には末尾に文化八年（一八一）の日付があり、六枚の図を含む。他方（草稿Bとする）は八枚の図からなり、日付を欠くが、草稿Aには無い、『麻杼比袁阿羅多武倍岐迦多』の「員外図」に相当する図をふくむなど、内容的に見て草稿Aと『麻杼比袁阿羅多武倍岐迦多』のあいだに位置するものである可能性が高い。草稿Aの書かれた文化八年が『三大考弁』が著された年であり、『麻杼比袁阿羅多武倍岐迦多』の完成した文化十二年が『天説弁』の著される前年であることは、これら一連の図説がまさに『三大考』批判者側の言説の全体と連動して形成されていった経緯を示している。

この『麻杼比袁阿羅多武倍岐迦多』冒頭の「員外図」（附図2参照）は、図の上下にふたつの同心円を描き、それぞれ「天」「地」と記す。すなわち、天と地とがすでに

分かれてはじまるところを表現したものと考えられるが、図の上方には「ハカリシラレヌサマヲコ、ロミニシルセルナリコノトキノコトハ神トイヘト知りタマフヘキヨシアラシ」〔此図ハユメ心ニモ目ニモオモヒウカフヘカラスハカリシラレヌコトハハカリシルヘカラスフヨキ〕という注記があり、あくまでもひとつの可能性として仮に描かれたものであることを強調している。草稿Bでこの員外図に相当する図（附図3参照）では、中央部に天と地とが分離した跡をおもわせる描写が見られるが、『麻杼比袁阿羅多武倍岐迦多』の段階ではこの部分がなくなり、そもそも天と地がひとつのものから分かれたのかどうかについては問わな

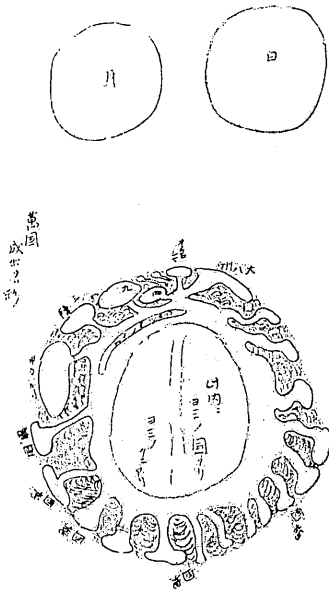


【附図2】



地の上部に二つの円が描かれ、各中央に「日」「月」と示された図（附図5参照）があるにもかかわらず、草稿B以降この部分は完全に削除されており、大平はここでは、『古事記』の解釈として、日月の生成についてはあえて語らない立場を選んだものと考えられる。

このような『麻杵比袁阿羅多武倍岐迦多』は、またひとつの世界の物語としての『古事記』の読みを提起するものであったが、これと対比した場合、『三大考』が『古事記』から読み出した神話の性質を、より明瞭に把握することができる。つまり、『麻杵比袁阿羅多武倍岐迦多』が、国の御柱を地の世界形成の鍵として「産霊」のはたらきを捨象し、かつ黄泉を天や地とはレベルの異なる世界と考えるこ



【附図5】

とで、天、地、泉の生成を同一平面では関連させ得ないものとして捉え、また、現実の日、月という天体へのつながりも留保したところで、『古事記』を読んでゆくのは対照的に、天、地、泉からなる宇宙全体の成立を、「産霊」というひとつの原理の下で統一的に説明し、さらに現実に目にするのできる日や月といった天体の存在をも、『古事記』の読解のうちに包含しようとするのが、『三大考』であった。このような、現実世界にまでわたる宇宙全体を説明する神話として『古事記』を読み出してしまったのが、『三大考』だったのである。

以上、『三大考』の成立とその後の論争に関わる資料の分析を通じて、『三大考』とそれをめぐる論争を、『古事記』の再神話化の問題として捉え直すことを試みた。今後さらにこのような立場から、『古事記伝』をはじめとして、『古事記』研究という課題そのものを、『古事記』をいかに読むかという制度の問題として問い直してゆきたい。

#### 注

(1) 「再神話化」とは、本来天皇の統治する世界を神話的に根拠づけるためのテクストである『古事記』が、読み直され、解釈を施されることによってあらたな意味を賦

与され、解釈者たち自身の世界を神話的に根拠づけ得るテクストとしてたちあらわれることを指す。『三大考』の問題性は、解釈や研究としての側面自体にはなく、このような神話化の側面にあるといふべきだろう。

- (2) 『三大考』『古事記伝』の引用は、それぞれ筑摩書房版本居宣長全集第十巻、第九巻により、末尾に頁数を示す。
- (3) 『三大考』を中心とする宇宙観の問題』（『紀元二千六百年記念 肇国文化論文集』、昭和十六年三月）、『三大考の成立について』（皇学館大学紀要第十輯、昭和四十七年一月）。

- (4) この『三大考』と『天地考』との日付の一致をどう見るかが問題であるが、『三大考』の場合実際の刊行までには六年を経ており、その間に中庸あるいは宣長自身によって修正が加えられた可能性も考えられる。

- (5) 『天地考』の引用は『松阪市史』第七巻所収の翻刻により、末尾に頁数を示す。

- (6) 『初稿本』における宣長の書き入れ箇所については、自筆本とあわせ、神宮文庫所蔵の謄写本を適宜参照した。

- (7) 『古事記』冒頭部の解釈については、神野志隆光『古事記』上巻の主題と構想』（古事記研究大系3『古事記の構想』、平成六年十二月）を参照。

- (8) 本居宣長記念館所蔵『天説弁々弁』『三大考弁々』への書き入れの引用は、同館所蔵マイクロフィルムからの焼き付け写真による。

- (9) 『三大追考』序、『七大考』の自筆本はいずれも服部哲

雄氏所蔵になり、前者は注(3)前掲西川『三大考の成立について』に翻刻、後者は東大本居文庫に写本を収める。

(10) 『靈能真柱』の引用は、新修平田篤胤全集第七巻により、末尾に頁数を示す。

- (11) この論争の経過については、前掲西川『三大考』を中心とする宇宙観の問題』、小澤正夫『三大考をめぐる論争』（『国語と国文学』、昭和十八年五月号）、前掲神野志『古事記』上巻の主題と構想』などの先行論文に触れられるところがある。なお、『三大考』論争に関連した著作は、これまでに披見し得たかぎりでもかなりの数にのぼり、その全体を、世界を根拠づけるものとしての神話の読み出し、すなわち再神話化の問題が争われた場として位置づけ直す必要があるが、くわしくは、他の機会にあらためて述べることとしたい。

- (12) 『三大考弁』の引用は新修平田篤胤全集第七巻所収『三大考弁々』に引くところにより、末尾にその頁数を示す。

- (13) 『天説弁』の引用は『植松茂岳 第一部』所収の自筆本の翻刻により、末尾に頁数を示す。

- (14) 『三大考鈴木朗説』（『文莫』第三号に翻刻）には、『国ノ常立尊モコノ葦牙ヨリナリマシテタ、神々ノナリマサン料ニナリイデタルモノトコソミュレ』とある。

- (15) 注(14)前掲書に、「ヨミノクニノ事、大地ノ表ベハコノ国ニテソノシタノ国ナレハ根ノ国底ノ国ト云ナルベシ」とある。

(16) 東大総合図書館所蔵の写本による。

\*なお、「天地初発考」、「麻杼比袁阿羅多武倍岐迦多」草稿に関する調査は、神野志隆光氏との共同で行った。「天地初発考」の調査に関して示された服部哲雄氏の御厚意と、本居宣長記念館蔵『三大考弁々』『天説弁々弁』の書き入れに関する同館吉田悦之氏の御教示に感謝する。また、本稿は一九九六年七月上代文学会例会における発表に基づいている。当日いただいた助言に謝意を表したい。

### 「上代文学」投稿規定

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文の分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 投稿論文はワープロ原稿をも認めるが、その場合にはなるべく字間・行間をゆったりと組み、表紙に四百字詰め換算した枚数を記す。
- 4 投稿論文は原文でなく、コピー二部を送る。
- 5 投稿論文の表紙には、投稿者の住所及び勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。
- 6 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 7 投稿論文の締切日は特に設定しない。
- 8 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 9 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定する。
- 10 投稿論文は返却しない。不採択の論文についてはその旨を通知する。